

G.M. ホプキンスの詩の世界 (1)

—知覚の豊饒—

宇佐美道雄

外国語教室

(1976年9月11日受理)

The Poetical Realm of G.M. Hopkins (1)

—The Opulence of Perception—

Michio USAMI

Department of Foreign Languages

(Received September 11, 1976)

In this paper, the author argues for G.M. Hopkins' opulent perception as one of the essentials that build up his realm of poetry. Giving examples from his poems, the keenness, fineness and rightness of Hopkins' senses are examined on the basis that in human sensory response there is the origin of man's existence. The author insists that all the poet's thoughts metaphysical, religious and artistic are rooted in the unrivalled excellence of his perception.

G.M.ホプキンスの詩は短く少いけれども、そこに込められた渾心の力と、そこから発する精気の輝きとは、読むものを圧倒せずにはおかない。そして優れた芸術が与えるあのめくるめく思いのうちに、ホプキンスの作品は私たちを生きるということの最も奥深いところへ連れ戻す。作品の力と輝きが、生の根源ともいふべき詩人の知覚そのものの烈しさと正しさから生ずるために違いない。

私たちは五官を通して外界を知覚し、自分の住んでいる世界を築くが、この外から束となって流れ込む知覚のみちがとだえた瞬間に世界は消滅する。生きるとは絶え間ない知覚作用によって作られる世界を生命体の内部に保有することにほかならない。そしてその限りにおいては、私たちの周囲の存在は個体の認識を越えた絶体の「物」ではない。個体の知覚がその鋭さや鮮やかさ、あるいは濃やかさや丸やかさの点で異なるだけ、私たち個々の住む世界は趣きを異にする。日ざし、風のそよぎも、すべての人に同じ知覚を生むわけではない。閃光とともに

に轟く雷鳴が心に呼び覚ます反応は、百人百様であるに違いない。

哀れむべきことに、人は自分の住む以外の世界を身をもって経験することがない。ただひとつ掛け替えのない世界に一度だけ生きて、隣人の世界に足を踏み込むこともない。そうはいっても私たちの生きる世界が、ひとりずつ全く違ったものであるとは思われない。人間の知覚は共通の部分を土台にして成り立っている。そのために私たちは自分の世界を他に伝えようと努めることができるし、また他の世界を押し量り、汲み取ることもできる。芸術家は知覚の仕組みが並みはずれて精妙にできており、一般人が漠然と知っているものを、より細かく、正しく、深く感じ取り、それを作品を介して他に訴える人たちである。芸術家の知覚が享受者の感性をゆさぶり、共鳴を起こさせ、なまなましい感覚、新鮮な経験、生きる証しを実感させる。芸術家の知覚が作品に結晶するまでには、複雑な内的過程を経なければならぬにせよ、生命のみ

なもとにあたる知覚力の天性の卓越は芸術家に必須の条件である。ホプキンスの詩の呼び起こす感動が、足もと深く湧き出た地鳴りの肉体を通り抜け、やがて天空に達する趣きを呈するのは、このことと深く結び付いている。

ホプキンスの残した決して多いとはいえない詩の中に、いくたびか忘れがたい夕焼けの西空が描かれる。詩人がグラマ・スクール在学中に書いたといわれる *A Vision of the Mermaids* にまず2箇所ある。

Plum-purple was the west; but spikes of light
Spear'd open lustrous gashes, crimson-white;
「西空はすももの深紅となったが、とがった光が幾すじもの槍となって、真紅と白に輝く深傷を突き開いた。」

Now all things rosy turn'd: the west had grown
To an orb'd rose, which, by hot pantings blown
Apart, betwixt ten thousand petal'd lips
By interchange gasp'd splendour and eclipse.
「いまやすべてがばら色に変わった。西空は球状のばらとなり、数え切れぬ花卉の唇からは熱い吐息に吹かれて、輝と蝕とが交互に吐き出された。」

あでやかな色ときらめく光が美しい夕暮を織りなし、視覚からの刺激が官能に触れる。溺れるばかり豊かな感覚から生まれる心象と、音と抑揚の効果を極限まで生かした語法とが、初期の習作にはっきりとあらわれている。

ホプキンスが1868年から1875年までつけた日記の中には一それは決して長い日記ではない—50回以上もの夕焼けの記述があるという。この時期のホプキンスは聖職者となるための厳しい訓練と研修にたずさわったが、修道士寮や教会学寮での夕暮れ、詩人はたそがれる西空をいくど魅せられるように見つめたことか。このころの7年間ホプキンスは詩作を絶っていたが、1875年の冬沈黙を破って中期のはじめを飾る大作 *The Wreck of the Deutschland* を書いた。そしてこの詩の第5聯に次の夕焼けが見られる。

[I] kissed my hand to the dappled-with-damson
west:

「(わが)手に口づけして、西洋すもものまだらなす西空に送る。」

“the dappled-with-damson west” は前に引用した *A Vision of the Mermaids* の第6行 “Plum-purple was the west” を思い出させるが、これらの詩句にはホプキンスの詩の特色がまことによくあらわれている。赤らん

だ西洋すもものイメージが呼び起こす鮮明な色彩と、“Plum-purple”, “dappled-with-damson” の鳴らす強い音の響きとは、読者の感覚の深部にゆさぶりをかける。一つの暮景もホプキンスの網膜には焼き付くように反応し、感覚が溢れて眩むばかりであったに違いない。さもなければどうしてこのような言葉遣いが可能であろうか。

忘れ難い夕空の描写をもうひとつ引用しよう。世に “Terrible Sonnets” と呼ばれるホプキンス後期の暗い作品群の先駆けとなる *Spelt from Sibyl's Leaves* の書き出しである。

Earnest, earthless, equal, attunabe, vaulty, voluminous, . . . stupendous

Evening strains to be time's vast, womb-of-all,
home-of-all, hearse-of-all night.

Her fond yellow hornlight wound to the west, her
wild hollow hoarlight hung to the height

Waste;

「おごそかな、この世ならぬ、一様に包み込む、すべてを調和させる、蒼窮なす、広大な…ただ驚嘆のほかなき夕べが、時の悠大な万物の母胎、万物の宿、万物の枢たる夜になろうとしている。その優しい黄色いランタンの明りは西にまわり、その強い空ろな白い光は高空にかかって、次第に薄れゆく。」

打楽器を連打するように第1行の始まりから多音節の形容詞が7つ棒に並んで “evening” を修飾するが、これらの語は意味でつながっているというよりは、むしろ音でつながっている感じさえ与える。たぶん意味とか音声とかのわくを越えてもっと奥深いところで関連し合うのであろう。“evening” にたいする詩人の溢れて言い尽くせぬ思ひが、これらの語の配列を不可避的に選ばせるに違いない。第2行の “time's vast, womb-of-all, home-of-all, hearse-of-all night” も同型同音の語のしつこいばかりの連なりと “womb”, “home”, “hearse” という人の一生を暗示する語義上の展開とがひとつに融合して、詩人の感得する “night” を表現し得ている。第3行に至って “Her fond yellow hornlight wound to the west,” と “her wild hollow hoarlight hung to the height” の2つの名詞句が音の上でもみごとな対称を作って、ホプキンになじみ深いまだらな夕空を描き上げる。

夕映えのあかね色の移ろうさまを美しいと感じないものはあるまい。しかしそれがホプキンスの眼に映ずるときの反応には尋常ならぬものがあつた。夕焼け空ひとつも詩人の過敏な知覚には衝撃となり、視覚を越えて噴きこぼれる感覚が総身を恐れに似た快感でしびれさせたかも知れない。もちろんホプキンスの知覚が過剰に反応す

るのは夕空に限られはしない。例の7年間の日記には、雲についての観察が170回以上も記されたし、そのほか星空、鳥、丘陵、花、樹木…数え切れない。この時期の3年間をホプキンはトスニーハーストにあるイエズス会の学寮で過したが、ある日道ばたに落ちたガラスのかけらに目をとめて、そのまわりをぐるぐる回った。これを見た庭師はホプキンの頭をおかしいと思い、他の神父が偉い学者だと教えても、どうしても信じなかったという。詩人の知覚がどれほど常人を越えたかを示すユーモラスな逸話ではないか。

1877年ホプキンは聖職者として叙品に先立って数ヶ月間に中期を代表するソネット10篇を書いた。そのひとつに詩人の感性の抜ん出た立派さを示す“*Pied Beauty*”がある。

Glory be to God for dappled things—
For skies of couple-colour as a brindled cow;
For rose-moles all in stipple upon trout that swim;
Fresh-firecoal chestnut-falls; finches wings;
Landscape plotted and pieced—fold, fallow, and
plough;

And all trades, their gear and tackle and trim.

「神に栄光あれ、まだらあるもののゆえに一ぶちの牛に似た二色の空、泳ぐ鱒の背一面に点彩されたばら色の斑点、燃える炭火色の栗の落ちた実、うその翼、区画され、継ぎ合わされた畑一畝地、休閑地、耕作地、あらゆる職業、それらを動かす歯車と滑車と内装、等々のゆえに。」

「まだらの美」を称えるこの詩の最初の行で詩人は“dappled things”のえにゆ神に栄光あれとうたう。“dapple”という単語はさきに“dappled-with-damson west”(*The Wreck of the Deutschland* St. 5)と用いられたが、ホプキンはこの語がよほど好きだったとみえて、“dapple-dawn-drawn Falcon”(*Windhover* 1.2)「まだらの曉に引き出された鷹」、*“The dapple-eared lily”* (*Duns Scotus’ Oxford* 1.3)「まだらの耳をした百合」、*“her dapple is at an end”* (*Spelt from Sibyl’s Leaves* 1.5)「その(夕暮れの)まだらも終りを告げる」のように、この語は詩集のあちこちに散見される。まだらなのはホプキンの美感にこのほかに訴える力があつたらしいが、それにしてもこの詩にうたわれる「まだらあるもの」はなんと日常のどこでも目に触れるものばかりではないか。牛のぶち、それに似た二色の雲、鱒の背の斑点、落ちた栗の実、鳥の翼…、それらは日ごろ人の目をひくに足りないものばかりにもかかわらず、ホプキン

ズの眼にうつる映像は時としてきらびやかな輝きを発し、詩人の全感覚を喜びで満たした。異常なまでに激しく、なまなましい知覚力を授けられた詩人にとって、そのわななく歓喜に、膝を屈して神の栄光を称えるほか何をなし得たろうか。

いうまでもなく、知覚は視覚を経るものばかりとは限らない。例えば同じ時期のソネット *Spring* に次の詩行がある。

……, and thrush

Through the echoing timber does so rinse and wring
The ear, it strikes like lightnings to hear him sing;
「そしてつぐみの声は、こだまする木立ちをぬけて、
聞くものの耳を濯ぎ、絞る。その歌声を聞くとまるで
稲妻に打たれるようだ。」

“rinse and wring”は布を洗うさまで、つぐみの鳴声の耳に触れる感じをあらわすが、2語の持つ同じ音の繰り返しが聴覚を刺戟する。鳥のさえずりはホプキンの耳に鋭く、心地よい圧力を加え、聴覚とも触覚ともつかぬ快感を身体に走らせる。その烈しさを詩人は“strikes like lightnings”と表現するが、ちょうどそれは稲妻が視覚に与える感覚と同じである。この部分はなにげない言いまわしながら、[ai]の母韻と[t], [k], [l]の連なり合う子韻とが、雷鳴の轟きと雷光の走るさまを簡短に言い得ている。このソネットは第1行“Nothing is so beautiful as Spring —”に始まり、オクティヴでは草、つぐみ、梨の木、青空、小羊をつぎつぎと喜びを込めて歌い上げる。つぐみのさえずりが快美を雷に打たれるように呼び覚ます知覚の世界とは、いったいどのようなものであろうか。

As kingfishers catch fire, dragonflies draw flame;
As tumbled over rim in roundy wells
Stones ring; like each tucked string tells, each
hung bell’s

Bow swung finds tongue to fling out broad its name;
Each mortal thing does one thing and the same:

「かわせみが火と燃え、とんぼが焰となるように、丸井戸のふちを越えてころげ落ちる石が音をたてるように、つまびかれた弦が鳴り、つり鐘が振られるたびにその名をひびかせるように、この世のものはみな同じひとつのことをする。」

これは1882年に書かれたと推定される無題のソネットの書き出しである。第1行の対称章句の音韻のすばらしさには目を見張らせるものがある。“kingfishers”と

“dragonflies”の音の対称が、“catch fire”と“draw flame”とそれぞれに応じた音の対比をつくる。聴覚のあまりの鋭敏から、ホプキンスにはしばしば言葉は意味よりも発音が優先して意識された。ホプキンスの特異な詩法は詩人の音とその響き合いへの異常なまでに鋭く、濃やかな知覚にみなもとを発している。ホプキンスの音の世界の豊がさは第2行以下の形象にもよくうかがうことができる。静寂と敬虔の支配する教会学寮での日々、「丸井戸の内壁に当って落ちる小石の音」とか、「楽器の弦の弾ぜられる瞬間に発する音」とか、「教会の鐘をゆするたびに中の金属が鐘に当って打ち鳴らす音」とか、ふだんなにげなく聞き流すものの音に、ホプキンスはよく耳を傾け、そしてひそかな感動を味わった。それらは鼓膜の奥に深く高い響きを残し、一見単調にみえる信仰の生活を豊潤な感覚で彩った。そしてホプキンスはその根源を「みな同じひとつのこと」一神のみわざと感ぜずにはいられなかった。

そうはいっても、知覚の細密が心地よい感覚ばかりを生むとは限らない。当然のことながら、恐れや驚き、苦しみや痛みも、また人一倍強く烈しい。もっともこれらの意識された感覚を生むまえ、いわば原初の知覚においては、それらは喜びとも恐れとも弁別しがたい一種のわななきに過ぎないと思われるが。ともあれホプキンスが44歳で早世する数ヶ月まえに書いたソネットの始まりに次の詩句が見られる。

The shepherd's brow, fronting forked lightning, owns
The horror and the havoc and the glory
Of it.

「牧羊者の額も、三叉状に突きささる雷光をじかに受けるとき、その恐怖と破壊と栄光とにひれ伏す。」

“forked lightning”は稲妻の鋭く走るさまを鮮明に言い得ているが、ホプキンスは雷震のたびに、三叉状の尖った鋤の突きささる思いで身を震わせたに違いない。そして恐れと荒々しさと立派さとに打たれて、しばらくは頭を上げることもできなかった。*The Wreck of the Deutschland*には“lightning”が2度用いられ、第4聯に“I did say yes/O at lightning and lashed rod;”「おお雷光と鞭打に、私は服す」、また第34聯に“a lightning of fire hard-hurled”「烈しく投げられた火の雷光」とある。暗を裂く轟きと閃きは、繊細な神経には鞭で打たれる思い、あるいは火を投げつけられる思いであった。

視覚、聴覚は知覚の主要な部分を占めるが、生と密着した知覚の中核にあっては、他の感官との区別はさほど明瞭ではない。ひとつの器官の働きが活潑であれば、そ

れはすべてに及ぶ。*The Wreck of the Deutschland*の第8聯にある次の例は、強いていえばホプキンスの味覚か触覚のなまなましさを伝えるものといえるかも知れない。

How a lush-kept plush-capped sloe
Will mouthed to flesh-burst,
Gush! — flush the man, the being with it, sour or
sweet,
Brim, in a flash, full!

「みずみずしさを湛え、ビロードのずきを被った野生のすももを口に含むと、果肉が破れ、ほとぼしる。酸いか甘いかいずれにせよ食べる人の全存在を、いかに瞬間にふちまで溢れさせることか。」

ここにはホプキンスの詩の特質がみごとに凝縮している。すもも類の果実の口中でつぶれる感触をこれほど強く、鮮かに、しかも巧みに表現し得るのは驚きである。ホプキンスの新鮮な知覚にあらためて舌を巻かずにはいられない。“lush-kept, plush-capped ..., flesh-burst,”と“Gush!—flush...flash”という[sh]の音を中心とした子韻や母韻の連及、“sour or sweet”とか“flash, full!”の頭韻などが、口の中で果汁のほとぼしる感触をなまに蘇らせる。“flush the man, the being with it”はひときわホプキンスらしい表現で、感覚が実際「全存在を溢れさせる」のである。“Brim, in a flash, full!”がホプキンスの詩の醍醐味を味わせる。ロ一杯に溢れる一瞬は“brimful”と綴るいとまを与えず、“brim”と“full”のあいだに“in a flash”が飛び込む。こうしてホプキンスはしばしば言葉に暴力を振る。その手荒さはときに顔をそむけさせるが、ホプキンスの刹那に奔騰する感覚を托すには言葉自体の目があらいのである。もともと言語は人間の知覚の共通部分を前提とするから、個体に特殊な経験を表わすには足りないという宿命を負う。詩が言葉の芸術である限り、芸術家のいたく世界が格別であればあるほど、言葉はさいなまれざるを得ない。ホプキンスが英語をちぎったり、よじったり、延ばしたりするあの力は、不可能を可能に変えようとする絶望的な試みでもある。

それはそれとして、ホプキンスのような詩人は、人の知らぬ恐ろしい味もまた味わねばならない。芸術家の研ぎすまされた知覚には、不快な刺戟は堪えがたい反応を招き、人にはかすり傷にすぎぬものも、ホプキンスには深傷となる。そして肉体の痛みは精神の苦しみを呼び、精神の懊悩は肉体の疼痛を伴った。

I am gall, I am heartburn. God's most deep decree

Bitter would have me taste: my taste was me;

.....

Selfyeast of spirit a dull dough sours.

「私は胆汁だ、胸やけだ。神の測り知れない命令が私ににがみを味わえとお望みになる。私の味は私だ。…心それ自身の酵母がこのにぶいねり粉を酸くしてしまう。」

1885年に書かれた9篇のいわゆる“Terrible Sonnets”のうちからの引用である。この年は死の3年前にあたり、ホプキンスは信仰もゆらく苦しみの中にあった。“gall”はこの語の持つすべての意味を兼ねる一胆汁、にがみ、遺恨、すり傷、苦悩、いらだち。“heartburn”も胸やけ、胃痛であり、不満、ねたみ、恨みでもある。一度味わったにがみや酸つばさの嫌悪感は詩人の味覚にこびりつき、恨み、悩み、ねたみなど精神の病むたびにそのこらえ切れぬ感覚が生新しく蘇る。自己を忌む心におのれはにがく、“I am gall, I am heartburn”と不気味な言葉が洩れる。しかも苛酷な神はホプキンスに自己を味わえとお命じになる。そして魂の腐敗はおのれを酸くするばかりである。

苦しくも楽しくも、すべての感覚の奥底にホプキンスは神を見たから、神は詩人にとって観念として存在するのではなくて、じかに五官に触れるものとしてそこに在った。したがってホプキンスの神の恐ろしさはしばしば形而下的な痛苦となり、しかもその程度は凡俗の思いを越えた。*The Wreck of the Deutschland* の第2聯の詩句はそのさまを垣間見させる。

Thou knowest the walls, altar and hour and night:
The swoon of a heart that the sweep and the hurl
of thee trod

Hard down with a horror of height:

And the midriff astrain with leaning of, laced with
fire of stress.

「おんみ、かの壁と祭壇と時間と夜とを知り給う。恐ろしい高みよりわれを襲い、投げ、力を込めて踏み給いしゆえに、この心臓のしばし止まれるを知り給う。この横隔膜のおんみの力に圧せられて引きつり、その力の猛火に縛られしを知り給う。」

“the walls, altar, hour, night”の4語は、深夜の礼拝堂の中ホプキンスが祭壇にひざまずいて必死に祈ったその恐ろしい時間を思わせる。神は高い畏怖の座より詩人に襲いかかり、投げとはし、その勢がホプキンスの心臓を失神させるまでに踏みつけるという。“swoon...sweep”と“heart...hurl...Hard...horror...height”の強いあるい

は持続する頭韻の効果が、張りつめたその恐怖感を再現する。最後の行の構文は“astrain”と“laced”の2つの形容詞が、“midriff”にかかり、“stress”は“leaning of”と“fire of”の両方に続く。語を対象的に配し、音の効果を用いて、長い句が大胆に切りつめられる。そうすることで横隔膜が引きつり、焼けつくほどの神の蛮力をまざまざと表わす。こうしてホプキンスには、神は全力をふりしぼってこらえなければ、まこと彼を組み敷き、押しつぶしてしまう実在であった。

知覚は生体とそれを取り巻く全存在との接点にあたるから、知覚が生鮮であればそれだけ世界は精彩を放ち、躍動に満ちる。人間の営みはすべて知覚を起点とし、認識、思惟、行為等個人にかかわるいかなる内面的過程もそれに累及されないものはない。ホプキンスの知覚は、色も形も響きも匂いも味も感触も…、いちどに烈しくしかも正しく反応したから、いつの場合にもホプキンスがまっ先に感知するものは、喜びとも恐れともつかぬ衝撃というべきものであった。この感覚に溺れるときには、官能の愉悅に陥込む危険もあった。しかしながらこの詩人の知覚力は根底において正しく、なんらの偏りを持たなかったから、その危険を避ける力も自ずからあわせ持った。ホプキンスの詩はいずれも詩人の感性の中によいものに向けて、ほしいままにすれば過度に陥りかねないまでに燃える性向のあることを示す一方では、これを抑え、正しい方向に向け、より高く昇化させる強い悟性の顕在することも同時に示す。ホプキンスを創作に向わせるあの美と善への激しい希求は、詩人の天賦の知覚力そのものに深く根ざす。快美は畏怖を呼び、畏怖は快美を昂める。よく知られるホプキンス初期の作品 *The Habit of Perfection* は、豊饒な知覚のないところに真の禁慾のないことを示す好個の例ということもできる。

Elected Silence, sing to me
And beat upon my whorlèd ear,
Pipe me to pastures still and be
The music that I care to hear.

「神に選ばれた沈黙よ、わたしに歌い、拍子をとってこの巻貝の耳を打て、笛を吹いてわたしを静かな牧場へ誘い、聞くことを願う音楽となれ。」

Palate, the hutch of tasty lust,
Desire not to be rinsed with wine:
The can must be so sweet, the crust
So fresh that come in fasts divine!

「口よ、味覚の慾の蓄えられるところよ、酒のそそがれることを望むなかれ。聖なる断食には必ずや水は甘く、固いパンもうまし。」

Nostrils, your careless breath that spend
Upon the stir and keep of pride,
What relish shall the censers send
Along the sanctuary side!

「鼻よ、気付かずに呼吸して自負心をかきたてるものよ、吊り香炉は聖殿のあたりに、いかばかりよい香りを送るか。」

O feel-of-primrose hands, O feet
That want the yield of plushy sward,
But you shall walk the golden street
And you unhouse and house the Lord.

「楼草に触れることを好む手よ、ピロードの草地を踏むことを望む足よ、しかしながらおまえらは輝く内陣の道を進み、聖櫃より聖体を出し入れする。」

ホブキンスはオクスフォードに在学中、22才のときカトリックに改宗したが、この詩はこの年に書かれた。7聯より成り、各聯において耳から唇、眼、口、鼻、触覚とそれぞれの感官を甘やかすことを戒め、敬神を論している。しかし禁慾と婦依を宣する詩る中に、かえって五官のよこびの浮き彫りされるのが、この詩人の作品にふさわしい。ホブキンスの思惟の世界は豊かな感覚の世界をバネにして展開する。したがってホブキンスにあっては識別、推論、判断等の過程の中で、その起動力ともいふべき知覚への求心力ないし回帰が絶えず強く働く。いつもホブキンスは、ものより本質的な部分、根源的な

営みへとさかのぼって眼を向ける。例えば“inscape”とか“instress”という造語はホブキンスの思想の特色を示すものとしてよく知られるが、つまりは“inscape”とは「ものをそのものたらしめている根元の性質」のことであり、“instress”とは「その性質を生み出す本源の力」のことである。ホブキンスは万物にたいしてその“inscape”を見分け、“instress”を究めようと努め、それがこの詩人の芸術活動の根幹をなした。あらゆる外観の奥にその現象の本質的かつ個性的な精髓を見抜き、しかもそうあらしめているみなもとの活力を感じ取ることがホブキンスには可能であったし、またおのずからそうせずにはいられなかった。詩人の外部世界への認識の起点にあの豊かな知覚作用が営まれており、その稀代の働きがホブキンスの感覚と思惟の世界を根底で染め上げたからにはほかならない。ホブキンスの感受性はいつも対象の奥へ奥へと向かい、生と外界とのぎりぎりの接点にまでさかのぼった。ホブキンスの詩が読者を捉えて命の奥底にまで引き戻す力は、生の原点において詩人が類を絶した強烈、濃厚、しかも方正な知覚を持つたことに発している。知覚の豊饒がホブキンスの感性にその本然の姿を与え、そこから他の詩人の近づき得ない芸術の世界を開かせた。

(本稿ではホブキンスの詩の世界の知覚にかかわる問題を論じたが、この詩人の形而上学と文学的手法の問題とは別稿で考えたい。)